

特 集

実践系学会との協力体制から考える体育方法専門分科会の果たすべき役割

青山 清英¹⁾

I. はじめに

前任の佐藤正伸理事長の後を引き継ぎ体育方法専門分科会の理事長を務めさせていただくことになりました。新理事会では、これまでの理事会における体育方法専門分科会のあり方に関する議論を引き続き検討課題としながら会の運営を進めております。ここでは、体育方法専門分科会と「指導に関する理論」を中核的な研究課題とする、いわゆる「実践系学会」との関係について、一般理論を取り扱う実践系学会、個別理論を取り扱う個別実践系学会という学類型に基づいて若干の提案をし、本稿を分科会のあり方に関する会員の皆様との有益な議論を進める契機とさせていただくことで、私のご挨拶といたします。

II. 体育学会における体育方法専門分科会の役割

体育学会における体育方法専門分科会の役割については、すでに朝岡正雄体育方法専門分科会長が本会報中の『体育方法専門分科会の「来し方」・「ゆく末」について』と『コーチング学のない体育学／一般理論のないコーチング学』のなかで詳しく述べておられるので、ここでは、朝岡会長の論を引きながら二点だけ確認しておきたいと思います。

第一点は、体育方法専門分科会は、その発足の経緯から「指導に関する諸問題」を取り扱う理論領域であるということです。つまり、指導実践において発生した様々な運動問題の解決過程を、様々な科学方法論によって記述していくという営為が体育方法専門分科会の学問的役割といえます。

二点目は、このような学問的役割を担う体育方法専門分科会の日本体育学会における学問的位置付けです。朝岡会長は日本医師会と日本医学会の関係を例に引きながら、日本体育学会の成立は指導実践に役立するという目的抜きには成立しないことを指摘していま

す。まさに、「指導に関する理論領域」である体育方法専門分科会こそが体育学の成立基盤ということですが。しかし、朝岡会長は、指導に関する理論領域の現状について、現在の状況は学術研究に立脚した「一般理論としての指導理論」が構築されているとは言い難い状況にあり、さらに言えば、個別のスポーツ種目の指導方法論さえも、必ずしも学術研究に立脚していないのではないかと指摘しています。つまり、いわゆる指導に関する一般理論及び個別理論の構築は、今日においても我々、会員の大きな課題となっていることを確認しておきたいと思います。

III. 一般理論と個別理論

日本体育学会第61回体育方法専門分科会シンポジウムにおいて実践系個別学会と体育方法専門分科会の関係がテーマとして扱われました。これは、体育方法専門分科会の役割について考えるためには、「指導に関する理論領域」における一般理論と個別理論の関係について検討しておくことが必要不可欠であると考えたためであります。

指導に関する一般理論と個別理論の関係は、どちらかが上でどちらかが下という関係ではありません。なぜならば、一般理論の存在は個別理論との関わり無しには存在することがありえないからです。

個々のスポーツ種目で収集された様々な経験法則が、はじめはそれぞれの相互関係は不明確なまま存在していたところから、科学的な検討などを介して理論化されることを通して、はじめてその知識の位置づけが明確化されます。このようにして、様々なスポーツ種目において理論化が進められ、その個別問題が明らかにされるようになると、それらの問題のさらなる検討のためには、いろいろなスポーツ種目に通底する問題が検討の俎上にのぼることになります。そこから指導に関する一般理論が生み出されていくこととなりま

1) 体育方法専門分科会理事長、日本大学

す。つまり、一般理論と個別理論とは相互補完的互恵関係にあるといえるでしょう。

IV. 体育方法専門分科会と一般理論構築に 関連する実践系学会の関係

上記のような一般理論と個別理論の関係をふまえた場合、一般理論の構築を目指している学会と体育方法専門分科会の関係はどのようになっていくのでしょうか。まず、その設立の経緯やこれまでの活動から密接な関係にある「日本コーチング学会」との関係を考えてみたいと思います。

日本コーチング学会は、2010年に「日本スポーツ方法学会」から名称変更をしています。その趣旨は2009年の「学会名改称に関する趣旨書」に見られるように、4つの理由からなります。

第一に、実践系の領域、コースあるいは科目名に「スポーツ方法」という用語が見られないなどの「スポーツ方法学」の社会的認知度の低さ。第二には、「コーチング」という用語が他分野に広がる現状を受け、「スポーツのコーチング」こそが「コーチング」という用語の本流であるという主張。第三は前述した発足の母体である「体育方法専門分科会」が「指導に関する理論領域」という学問的ルーツ。最後に、スポーツ方法学という用語が持つ国内外における意味内容の共通性の成立に関する問題です。このような理由から2010年に名称変更が行われました。ここではさらに、朝岡会長が本会報や「体育学研究」に掲載された『ドイツ語圏における発展過程から見たコーチング学の今日的課題』（2011年）のなかで示している学問論的な歴史的経緯を確認しておきたいと思います。

まず、「体育方法」という名称を考えるにあたり、「指導に関する理論」の発展過程をたどると、体育方法学は「体育の理論」のその分化的発展から見た場合、体育の科学化の要請から体育科学を経てスポーツ科学という名称が用いられていくようになるなかでスポーツ方法学と名称が変更していきました。そして、このスポーツ方法学は、トレーニング学が登場し、トレーニング学がトレーニング科学へと展開していく過程で、トレーニング計画論の一部として発展的に継承されていくことになります。すなわち、今日ではスポーツ方法学は、独立した学領域というよりもトレーニング科学の一部という位置を占めていることになります。

この一連の過程のなかで確認しておかねばならない

ことは、トレーニング科学がスポーツ方法を内包していることから分かるように、日本語の意味において多用されている「トレーニングに関する理論」というよりも広義の意味内容をもつ「コーチングに関する理論」であるということです。したがって、スポーツ方法学会がコーチング学会へと名称変更したことは当然の成り行きともいえます。

このようなことから、体育方法専門分科会とコーチング学会はその発足の組織論的な歴史的経緯のみならず、学問的発展経緯からも強い協力関係にあるのは当然のことと言えます。

ここで付け加えておきたいことは、学問的発展過程に関連する「日本トレーニング科学会」との関係であります。日本トレーニング科学会は、健康や体力の維持・向上を目的とした運動から、エリート競技スポーツに至る「トレーニング」に関する科学的研究の発展まですべてに貢献することを目的としています。学問的発展過程をふまえると、今後、トレーニング科学会との協力関係も重要な課題となります。

さらに、朝岡会長は論考のなかで、「体育の理論」は体育では何を教えるのかという「体育教授学」、運動財の具体的な指導方法を提示する「体育方法学」、動きの質的評価と形成の問題を扱う「体育運動学」の三つの研究領域が体育の理論の中核領域として独立して扱われるようになったと指摘しています。このようなことから、「体育科教育学」「スポーツ教育学」「スポーツ運動学」との協力関係も重要になると考えられます。体育科教育専門分科会は体育方法専門分科会から分派して設立されたという組織論的な事実をとっても「日本体育科教育学会」「日本スポーツ教育学会」との関係は、その研究対象として競技スポーツだけではなく学校教育を中心とする教育現場を重視するという観点（もちろん大学の一般体育も含まれます）からも重要であるといえます。さらに、朝岡会長の論考でも指摘されていますが、今後のコーチング学の発展には感覚論的な運動研究、すなわち運動体験や運動経験といった主観的事実を基盤にした研究が不可欠であります。したがって、現象学的・人間学的立場から研究を進展させている「日本スポーツ運動学会」との協力も不可欠であるといえます。

V. 体育方法専門分科会と個別理論を 取り扱う実践系学会

次に体育方法専門分科会と個別実践系学会との関係

を考えたいと思います。先ほど確認したように、一般理論と個別理論は相互補完的互惠関係にあります。一般理論の構築は、具体的な個別スポーツ種目に関する研究成果抜きには成り立ちません。すでに述べたように、体育方法専門分科会では、日本体育学会第61回体育方法専門分科会シンポジウムにおいて実践系個別学会と体育方法専門分科会の関係をテーマとして議論いたしました。ここでは、個別学会からのシンポジストの先生方より多くの意見を頂戴することができ、体育方法専門分科会のあり方を考える上で非常に有益であったと思います。

日本体育学会における体育方法専門分科会の発表内容を見てみると、そのほとんどは個別スポーツ種目に関する研究であります。つまり、個別実践系学会での発表内容も体育方法専門分科会での発表もなんら変わらないのが現状です。むしろ、個別の問題に関する議論であれば、個別学会での活動の方が発表者にとって有益かもしれません。それでは体育方法専門分科会は一体何をすればよいのでしょうか。

先ほども述べたように、一般理論の構築は個別理論の発展抜きには考えられません。したがって、体育方法専門分科会の発表内容が、個別理論に比べて抽象性の高い一般理論だけの発表になってしまうということは考えられません。しかし、私たちは少しずつ「一般理論構築のための個別理論研究」について考えていくことが求められています。一見、個別理論の発表に見える内容でも、その知見が一般理論に対してどのような貢献ができるのかという問題意識をもった発表、あるいは体育方法専門分科会では、球技に関する戦術的研究なども多く見られます。発表セッションのテーマ

を「戦術」として様々な種目をひとつに括って、全体発表の後、種目横断的な議論を行うなど体育方法専門分科会での発表でなければ難しい「議論の場」を設定することなどによって一般理論構築へのエネルギーを高めることが重要だと思います。これはシンポジウムやワークショップなどにおいても同じことが言えると思います。

以上のようなことを進めることから、体育方法専門分科会と個別実践系学会は、「指導（コーチング）に関する理論領域」の車の両輪となってこの分野の発展に寄与することができると思います。

VI. おわりに

体育方法専門分科会の役割について、実践系学会との関係からいくつかの考えを述べさせていただきました。42年の歴史を誇る体育方法専門分科会は、その時々の歴史的な状況のなかで大きな役割を担ってきたと思います。これは諸先輩の方々のご苦勞によるところだと思います。したがって、我々の役割は、これまで培ってきた財産を大切にしながらもこれを超越していくことにあります。もちろん、それは学問的・社会的使命によるものでなければなりません。

また、日本体育学会は一般社団法人化という組織改編を進めています。体育方法専門分科会のあり方もこれによって大きく変化することが予想され、今年は大きな転換点になる年と考えます。体育方法専門分科会の学問的な大きな飛躍のために会員諸兄のご意見を伺いながら会の運営を進めてまいりたいと思います。ご協力方よろしくお願い申し上げます。